

対格のスキーマ的分析とネットワーク化

菅 井 三 実

0. はじめに

本稿の目的は、現代日本語における対格の意味を包括的に考察し、スキーマによる特徴づけとネットワーク化を行うことにある。まず、第1節で対格の中核的意味を《[起点]→[過程]→[着点]における[過程]のプロファイル》と規定し、第2節で《過程》の特質を相対的な視点から具体的に検討する。第3節で空間次元の用法を考察し、最後の第4節で[時間]や[状況]を含めた包括的なネットワーク化を試みる。

1. 対格のスキーマ的規定

この第1節では、まず「ヲ格」の基本的な特性を考察し、経験的なイメージスキーマを援用して意味的な観点からの特徴づけを提示する。

一般に、対格の用法を列挙するというとき、細かく見れば多くの区分も可能であるが、大雑把に言えば次の5つに整理できる。

- | | | |
|--------|--------------------------------|------|
| (1)(a) | 太郎がリビングで夕方まで <u>テレビ</u> を見ていた。 | [対象] |
| (b) | 太郎が健康のために <u>公園</u> を自転車走っている。 | [経路] |
| (c) | 太郎が急用で <u>部屋</u> を出て行った。 | [起点] |
| (d) | 太郎が学生時代にカナダで <u>3週間</u> を過ごした。 | [時間] |
| (e) | <u>雨の中</u> を太郎が病院まで見舞いに来てくれた。 | [状況] |

このうち、(a)の[対象]が最も基本的な意味であろうが、仁田(1993)でも述べられているように、[対象]の性質も一様ではない。その次の(b)の[経路]と(c)の[起点]については、動詞に意味的な制約が課せられることが大きな特徴で、[経路]と解釈されるのは動詞の意味が移動の概念を含んだものときであるのに対し、[起点]は動詞が離脱や出発の意味を含むものときであることが知られている。さらに、(d)の[時間]や(e)の[状況]も、特別扱いすることなく体系の中で適切に位置づけられなければならない。

まず、具体的な分析に先立って方法論的に厳しく批判されるべきは、影山(1980:40-41)や三宅(1996:147)のように、対格を意味的に空虚なものとして扱う分析である。というのも、対格を意

味的に空虚と仮定すると、その段階で、対格に関わる文法現象に対して意味的な説明を放棄することになるからである。同様に、城田(1993:70-72)のように対格を画然と2種類に区別する方法も退けるべきであろう。やはり、対格の全体的な統一性や体系性を看過することになるからである。

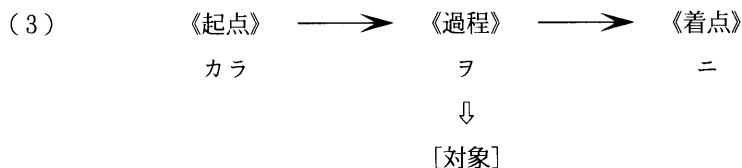
それでは、対格の本質的な意味はどのように特徴づけられるであろうか。形式の意味が体系の中で相対的に規定されるという常識的な観点から言えば、次の例が示すように「ヲ格」は主格の対極にあって、かつ「カラ格」と「ニ格」の間に位置づけられることが分かる。

- (2)(a) 社長が京都から大阪に支店を移した。
 (b) 太郎が花子を係長から課長に抜擢した。

(a)で「移す」という事象において働きかけを受ける側の対格「支店」は働きかけを与える側の主格「社長」と対峙する関係にあり、しかも、空間的に奪格の「京都」と与格の「大阪」の中間に位置づけられることになる。同様に、(b)のような抽象的な変化においても対格の「花子」は奪格の「係長」と与格の「課長」の間に位置づけられる。

同時に確認しておかなければならないことは、対格は単に「カラ格」と「ニ格」の中間に位置づけられるというだけでなく、動詞によって表される事象において、奪格と与格が各々《はじまり》と《終わり》をプロファイルするのに対し、対格は《はじまりと終わりまでの間》としての《過程(process)》をプロファイルするという点である。前掲の(2)(b)について言えば「抜擢する」という事象において奪格の「係長」が《はじまり》の状態としてプロファイルされ与格の「課長」が《終わり》の状態としてプロファイルされるのに対し、対格の「花子」が事象において両者の途中をたどるものとしてプロファイルされることが分かるであろう。^[1]

このとき、Johnson(1987:113-117)、池上(1993)、山梨(1994a:103)などにならって、奪格による《起点(source)》と与格による《着点(goal)》を結ぶ「イメージスキーマ(image schema)」を想定し、2つの点の間を独自に《過程(process)》と名付ければ、[対象]の対格は《過程》上にあるモノをコード化するということができ、次のように図示される。



(3)の図式は、よく知られた《SOURCE-PATH-GOAL SCHEMA》を基本に据えつつも、中間部の《経路(path)》を《過程(process)》に変更したものであり、格との対応は《起点》《過程》《着点》が

各々「カラ格」「ヲ格」「ニ格」で実現される。

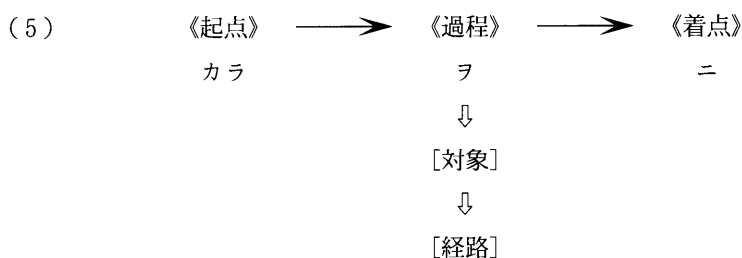
もちろん、《起点》と《着点》の間を《過程》と規定し、通常の《経路》としなかったことには理由がある。すなわち、もし《起点》と《着点》の間を《経路》と規定すると、対格の意味役割として1次的に空間的な[経路]が引き出された上で、その[経路]から2次的にモノ的な[対象]が引き出されることになり、結果として Hopper and Thompson(1984:746)や Claudi and Heine(1986:302)のいう隠喩的写像の「単方向性(unidirectionality)」に反するからというものである。上図のように、《起点》と《着点》の間を《過程》と規定することにより、一般的な「モノから空間へ」という隠喩的写像の単方向性に符合する形で[対象]から[経路]の順に拡張させることができるのである。

上述のように、対格が「カラ格」と「ニ格」の間に位置づけられ、事象の《過程》をプロフィールするという特質は、次のような[経路]においても保持される。

- (4)(a) 太郎が東京から国道1号線を大阪に向かった。
 (b) 宇宙の彼方から彗星が軌道上を地球に接近しています。

(a)において下線部の「国道1号線」は奪格の「東京」と与格の「大阪」の間にあるというだけでなく、時間的な経緯を含めた「向かう」という事象の《過程》において「太郎」が位置する空間的領域を指定するものとして分析される。(b)についても同様である。^[2]

かくて、[経路]を前掲の図式に接続させる形で表せば、次のようになる。



このように、[対象]と[経路]をスキーマ上の《過程》から導き出すことによって、なぜ[経路]が「ヲ格」で標示されるかという素朴な問いにも自然な論理で答えることができる。すなわち、移動においては[経路]こそが空間的な《過程》にほかならないからである。^[3]

ところで、奪格と与格の間にあるものをコード化するという特質は、実は動詞が自動詞のとき主格NPが有する性質でもある。次の例が示すように、主格は[起点]と[着点]の間で変化を被るものをコード化することができる。

- (6)(a) 支店が京都から大阪に移った。

(b) 花子が係長から課長に昇進した。

(a)において主格の「支店」が移動を被るのは「京都」と「大阪」の間であって、逆に言えば[起点]と[着点]の間に所在するのが主格の「支店」ということになる。このことは、(b)のような抽象的な状態変化においても同様であり、これらの点から、自動詞構造の主格も、他動詞構造の対格と同様に《過程》を実現し得ることを認めなければならないが、両者を意味的に同じと考えてはならない。主格が対格と根本的に異なるのは自明であって、両者の差異は、主体が自律的に変化を被るようにみなされているのに対して、対格は主体のコントロールによって他律的に変化を被るように見做されることに帰着されるからである。

以上、本節では、対格を《過程のプロファイル》と特徴づけるとともに、[対象]と[経路]が同一のスキーマから自然に導出されることを提示した。

2. 対格の過程的特質

この第2節では、前節で提示した対格の《過程》的特質を与格との対比において検討する。

前節における議論の要点は「ヲ格」をスキーマにおける《過程》と規定し、そこから[対象]や[経路]を導出するというものであった。ここでいう「ヲ格」の《過程》的特質とは、およそ“はじまりと終わりの中間”として特徴づけられるが、次の例が示すように、事象における《起点》《過程》《着点》は決して一義的に決まるわけではない。

(7)(a) 始まり *から / を / *に待つ。

(b) 終わり *から / を / *に求める。

この例で、下線部の「始まり」や「終わり」が文字通り事象全体の“はじまりの部分”や“終わりの部分”であっても、それぞれが常に「カウ格」や「ニ格」で標示されるわけではない。あくまで格標示は動詞や他の格との相対的な関連で決まるのであって、実際、下線部の「始まり」や「終わり」が「ヲ格」で標示されるのも、各々「待つ」や「求める」という事象の中で《過程》として把らえられるからにはかならない。

さて、本稿の分析に批判的な疑問として予想されるのは、例えば「作る」などの作成動詞において所謂「結果目的語(effectum object)」が「ニ格」ではなく「ヲ格」で標示されるのは何故かというものであろう。というのも、客観的に言えば、作成動詞文の結果目的語は「作る」という事象の結果的な局面において初めて完全な姿をなすものであるから、前節のスキーマ化に従えば「ニ格」での標示が期待されるからである。ところが、実際には次の例が示す通り、下線部の結果目的語は対格で標示され、与格では標示されない。

- (8)(a) 粘土でスポーツカーを作る。
 (b) *粘土でスポーツカーに作る。

たしかに、結果目的語の「スポーツカー」は「作る」という事象の途中の段階では“単なる粘土”あるいは“未完成のスポーツカー”でしかないわけだから、その段階で「スポーツカー」と呼ぶのは奇妙に感じられるかもしれない。しかし、それにもかかわらず、動詞「作る」に対して結果目的語の「スポーツカー」を対格で標示するのは、事象の《過程》において“未完成のスポーツカー”を“スポーツカー”と把らえる換喩的な機構が働くためと分析される。その論拠として次のような傍証が挙げられよう。

- (9) A: 何か作っているようですが、それは何ですか？
 B: スポーツカーです。

この会話例が示すように「作る」という行為の途中の段階で、発問者Aによる「それ」の指示対象が十分な体裁をなしていなくても「それは何ですか」という問いに対し、Bは「それ」を「スポーツカー」と答えることができるので、換喩的に“未完成のスポーツカー”が“スポーツカー”と把らえられているとの分析は正しいと言っていであらう。実際「作る」という事象の《過程》にある「それ」は“未完成のスポーツカー”と把らえるより“スポーツカー”と把らえる方が範疇化という観点から言っても合理的であり、したがって、結果目的語が「ヲ格」で標示されるのは経験的にも自然なことなのである。^[4]

同時に、何故「結果目的語」が「ニ格」で標示され得ないかについても説明しなければならないであろう。その理由について要点だけ先に言えば「ニ格」が程度の差こそあれ自動詞構造の「ガ格」または他動詞構造の「ヲ格」と《一体化》に向かうことに帰着される。ここで「ニ格」が《一体化》に向かうと分析されるのは、山梨(1994b:106-108)が「ニ格」に関して提案した《収斂性》《密着性》《到着性》《近接性》という4つの認知的制約が《一体化》の度合いを系列的に示したものとして理論的に収束するためであり、それぞれ次のように例示される。

- | | | |
|---------|--|------|
| (10)(a) | 胡椒が <u>スープ</u> に入る / 胡椒を <u>スープ</u> に入れる | 《収斂》 |
| (b) | 実技が <u>試験</u> に加わる / 実技を <u>試験</u> に加える | 《密着》 |
| (c) | ボールが <u>外野</u> に飛ぶ / ボールを <u>外野</u> に飛ばす | 《到着》 |
| (d) | 針金が <u>内側</u> に曲がる / 針金を <u>内側</u> に曲げる | 《近接》 |

これらの例から《収斂性》《密着性》《到着性》《近接性》の4つが独立した要因というより、むしろ《一体化》の度合いを系列的に示したものとしてスケール化され、具体的には《収斂》>《密着》>《到着》>《近接》の順で度合いが高くなる。

着>近接》の順に右に行くほど《一体化》の度合いが弱くなることが分かる。しかも、下線部の「ニ格」と結び付く成分は、前段のような自動詞構造の主格か後段のような他動詞構造の対格に限られる。かくして、結果目的語を「ニ格」で標示できない理由は、結果目的語を「ニ格」で標示したとき「ガ格」と「ニ格」が何らかの程度において一体化する方向性が生じることには帰着される。作成動詞文における「ガ格」と「ニ格」の關係に《一体化》の側面はないからである。^[5]

次いで、対格と与格が交替するように見えるケースについて考察したい。次のペアにおいて、(a)の「ヲ格」は当然[対象]と分析されるが、国立国語研究所(1997:121)では(b)の「ニ格」も[対象]と記述されている。

(11)(a) 太郎を怒った。

(b) 太郎に怒った。

確かに、このペアでは「ヲ格」と「ニ格」が交替しているようにも見えるが、(a)の「ヲ格」と(b)の「ニ格」は知的意味において明確に異なるのであって、両者が同じ意味を担うことはない。次のペアが示すように、下線部のNPを事柄としての「太郎の成績不振」に変えると、対格だけが容認され、与格は認められなくなる。

(12)(a) 太郎の成績不振を怒った。

(b) #太郎の成績不振に怒った。

(a)が自然に容認されるのは下線部の「太郎の成績不振」が「怒る」という事象の中で過程的な[対象]として適切だからであり、逆に、(b)の容認度が低くなることから「ニ格」が[対象]を表してはいることが分かるであろう。^[6] 実際「ニ格」が[対象]を標示していないことは、次のように「ヲ格」と「ニ格」と共起させることによって一層はっきりする。

(12)(a') 太郎の成績不振を教科担任に怒った。

つまり、動詞「怒る」を述語とするとき「ニ格」は「怒る」という事象の感情的な[着点]ないし[方向]を表すのであって、したがって「ニ格」に「ヲ格」と同じ[対象]の意味をもたせるのは全くの誤りということになるのである。

最後に、通時的な事情によって理論的な予測と合わなくなるケースに触れておきたい。類語的な「見る」と「会う」は共に[対象]の格標示に「ヲ格」が期待されるが、実際は次のペアが示すように、(a)の「見る」が「ヲ格」をとるのに対し、(b)の「会う」は「ニ格」でなければならない。

- (13)(a) 花子 を / *に見る。
 (b) 花子 *を / に会う。

(b)において「会う」が「ニ格」をとるのは語源的に「会う」が「合う」に由来し「一つになる」の意味から「ニ格」をとらなければならなかったためと理解される。このように、スキーマによる予測が事実に合わないケースも通時的な理由によって一定の動機づけが与えられるのであって、理論的な不備ではないことを記して確認しておきたい。^[7]

以上、本節では、特に「ニ格」との相対性を考慮しながら、対格の《過程》的な特性を幾つかの側面から検討した。

3. 空間の対格

この第3節では、空間ドメインで用いられる[経路]と[起点]について考察する。

第1節で述べたように、空間次元の[経路]はスキーマ上の《過程》から2次的に導かれ、事象の《過程》において主格NPが位置する空間的領域を表す。

- (14)(a) 日曜日には、よく渋谷を歩いている。
 (b) 台風13号は勢力を弱めながら太平洋上を北西に進んでいます。

ただし注意すべきは、久野(1973:58-60)や児玉(1991:94-95)の見解に反し、対格による[経路]が必ずしも《全体性》を満たすわけではないという点である。実際、下線部の「渋谷」や「太平洋」が現実の領域全体を指示していないことは自明であろう。^[8]

同時に重要なのは、[経路]の対格も《過程》の特質を保持していることであり、次のペアが示すように、空間の「ヲ格」が「デ格」と交替するときも知的意味において明確に異なる。

- (15)(a) 花子が交差点を左折した。
 (b) 花子が交差点で左折した。

つまり、(a)のように「ヲ格」で標示されたとき「交差点」は「左折する」という行為において空間的な《過程》をプロファイルしたものであるから「左折する」という行為の《過程》に耐え得るものでなければならない。これに対して、(b)のように「デ格」で標示された「交差点」は、菅井(1997)でも述べたように「左折する」という行為の時点で主格の「花子」が所在していたという関係でしかないので、その時点で「花子」が所在できるところであれば「交差点」に何ら条件は課されない。このことは、次の例によって一層はっきりする。

- (16)(a) ?花子が砂漠の真ん中を左折した。
 (b) 花子が砂漠の真ん中で左折した。

このとき(a)が容認不可能になる理由は、百科辞書的な知識として「砂漠の真ん中」が「左折する」ときの《過程》をプロファイルするのに適切な内部構造をもっていないことに帰着される。これに対して、(b)の容認度に問題がないのは「デ格」で標示された場所NPには「左折」の時点で主格の「花子」が離脱を伴わずに所在できるところであれば特別な条件が課されないためと説明されることになる。

次に、対格による[起点]の標示に考察を進めたい。考察対象となる具体的な言語現象として、次のペアが示すように、動詞が《離脱》の概念を含むとき[起点]の格標示は奪格と対格で交替が許される。

- (17)(a) 生まれた町から太郎が出た。
 (b) 生まれた町を太郎が出た。

つまり、対格には奪格と同様に[起点]を標示することができるが、このとき重要なのは[経路]と[起点]が相補的に機能するという点である。具体的に言えば、対格で[経路]を実現し得るとき対格は常に[経路]を実現し[起点]を実現することはなく、逆に、対格が[起点]を実現し得るのは対格が[経路]を実現し得ないときに限られるというのが本稿の分析である。その論拠は、次の例が示すように、動詞が対格で[経路]を実現し得るとき対格が[起点]を標示し得ないことに求められる。

- (18)(a) 国道を帰った。 [経路]
 (b) 大阪から帰った。 [起点]
 (c) *大阪を帰った。 [起点]

つまり、動詞「帰る」は(a)のように[経路]を対格で標示し得るので、対格は常に[経路]として解釈され、したがって、[起点]は(b)のように奪格で標示すべきであって、(c)のように対格で標示することはできない。これにより、[経路]が実現可能のとき対格は常に[経路]としてのみ解釈され、決して[起点]と解釈され得ないことが分かるであろう。

また、[経路]と[起点]が相補的に機能するとの分析は、[経路]と[起点]の両方を同時に対格で標示できないという事実からも明示的に確認される。すなわち、次のペアにおいて、(a)のように下線を施した[起点]の「西宮IC」を「カラ格」で標示すれば文法的に適格であるが、(b)のように「ヲ格」で標示すると非文になる。

- (19)(a) 西宮 I Cから急いで高速道路を来た。
 (b) *西宮 I Cを急いで高速道路を来た。

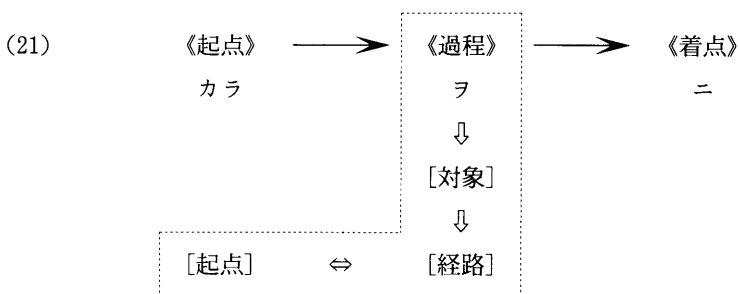
つまり、[起点]と[経路]の両方を同時に対格で実現させることはできず、これにより、[経路]の対格と[起点]の対格が相補的に機能するとの分析が明確に補強されると思われる。

なお、(19)と対照的に、[経路]と[対象]、[状況]と[対象]、[状況]と[経路]、[状況]と[起点]などの組み合わせであれば、次の例が示すように、意味役割の異なる2つの対格NPが同じ節の中に共起することが可能である。

- (20)(a) 次郎が非常階段を必死で犯人を追いかけた。 [経路]と[対象]
 (b) 次郎が批判の中を一人で犯人を捜し続けた。 [状況]と[対象]
 (c) 次郎が大雨の中を黙々とグランドを疾走した。 [状況]と[経路]
 (d) 次郎が大雨の中を憤然と部屋を出て行った。 [状況]と[起点]

(a)~(d)では、各々[経路]と[対象]、[状況]と[対象]、[状況]と[経路]、[状況]と[起点]が両方とも対格で標示されており、これらの組み合わせであれば、意味役割の異なる2つの対格成分が同じ節の中に共起することも不可能ではない。それにもかかわらず、排他的に(19)のような[経路]と[起点]の共起が許されないということは、[起点]と[経路]が相補的に機能するという本稿の仮定を支持するものと思われる。

これらの考察から、対格の意味役割をコア的な《過程》からの隠喩的写像としてネットワーク化すれば、次のように図示できる。



この図で[起点]と[経路]の間に両方向矢印の↔を付したのは、[経路]と[起点]が相補的に機能することを反映しての措置である。

最後に、[起点]に関して付け加えるべきは、対格による[起点]が対格に固有の《過程》性を保持しており、この点で「カラ格」と弁別的に差別化されることである。実際、次のように、離脱の《過程》がプロフィールできないとき[起点]は対格で標示できない。

(22)(a) 東村山市から意味論の天才が出た。

(b) *東村山市を意味論の天才が出た。

この例で、[起点]の「東村山市」を対格で標示できないのは「出る」という事象の《過程》をプロフィールできないためであり、その理由は動詞「出る」が意味的に<離脱>より<出現>の側面を前景化したものであって離脱の《過程》を描写したものではないためと説明される。このように、離脱の《過程》がプロフィールできないとき[起点]が対格で標示できないことから、対格による[起点]が対格に固有の《過程》性を保持していることが確認されると思われる。^[9]

以上、本節では、空間次元の[経路]と[起点]を考察し、両者が相補的に機能することを示すとともに、[経路]や[起点]にも対格に固有の《過程》的特質が保持されることを確認した。

4. 包括的ネットワーク化

この最後の第4節では、前節までの議論を踏まえ、[時間]や[状況]への拡張と包括的なネットワーク化を試みる。

すでに第1節から第3節でも述べたように、具象的な[対象]から空間的な[経路]への拡張が Heine, *et al.*(1991:157)のいう次のような階層に従うことが伺える。^[10]

(23) 人間 → 物体 → 過程 → 空間 → 時間 → 性質

つまり、最も基本的な範疇と言われる[対象]は基本的に「人間」や「物体」次元のものであり、第3節で取り上げた[経路]と[起点]は「空間」次元のものであるから、[対象]と[経路][起点]との関係は(23)の階層に沿った隠喩的拡張ということが言える。さらに、この階層が正しく予測する通り、対格は空間から時間への拡張が観察される。

(24)(a) 山中の険しい道を必死に駆け抜けた。 [経路]

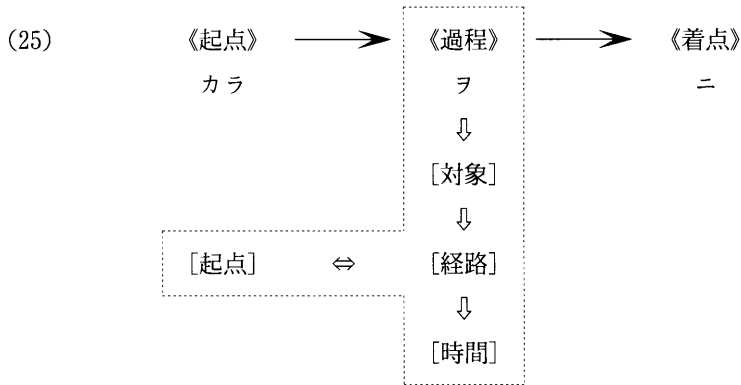
(b) 1990年代の前半を必死に駆け抜けた。 [時間]

(c) 1990年代の前半を静かにカナダで過ごした。 [時間]

ここから(a)(b)(c)の順に「空間から時間へ」の滑らかな拡張が確認されよう。まず、(a)から(b)にかけては、同一の述語をとりながら、下線部のNPが「空間」から「時間」へ変更されることで意味解釈も[経路]から[時間]に推移する。また、(a)や(b)の述語動詞には空間的な移動の意味が残っているが、(c)のように述語の語彙的な意味から空間的な側面がなくなることで、全体として[時間]の解釈が自然になる。

かくて、[時間]を[経路]からの拡張と位置づければ、対格における意味役割のネットワーク化

は次のように図示できる。



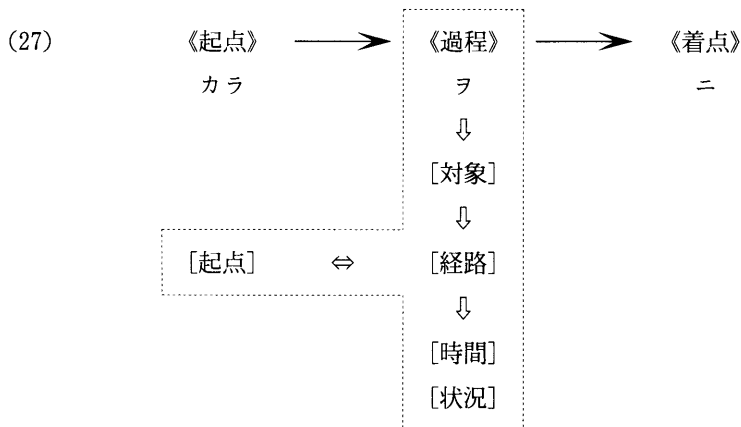
このように「モノから空間」ないし「空間から時間」という隠喩的拡張によって対格の意味役割は適切にネットワーク化されるのである。^[11]

さらに、[経路]や[時間]の延長線上に位置づけられるのが[状況]である。

- (26)(a) 花子は雨の中を傘もささずに立ち続けた。
- (b) お忙しいところを、わざわざ有り難うございました。

このとき、下線部の逐語的な構成を見ると、対格成分は「中」や「ところ」のような空間名詞が主要名詞になっているので、[状況]への拡張においては直接のソースを[時間]と考えるより、空間的な[経路]からの隠喩的拡張と考える方が適切であろうと思われる。^[12]

したがって、[状況]を含めて対格の意味役割を総合的にネットワーク化すれば、最終的に次のような姿になる。



ここで、[時間]と[状況]の間に矢印⇓を入れなかったのは、上述のように、[状況]が[時間]を直接のソースとして拡張したわけではなく、むしろ[状況]は[時間]と同様に空間からの拡張と分析されることに基づくものである。

最後に、対格が担う複数の意味役割について「プロトタイプ効果(prototype effect)」という観点からネットワーク化の妥当性を確認する。言うまでもなく「ヲ格」が担う[対象][経路][起点][時間][状況]は範疇内で対等の地位にはなく、ここに Lakoff(1987:Ch.3)のいう「プロトタイプ効果」が反映されることになる。^[13] 具体的には、対格が《過程》として特徴づけられることから「プロトタイプ効果」は《起点》と《着点》を各々「カラ格」と「ニ格」で標示できるかどうかにも現れる。

まず、[対象]の場合、もちろん全ての用法で可能というわけではないが、移動や変化を伴う事象において《起点》と《着点》を各々「カラ格」と「ニ格」で標示できることは、第1節の(2)で例示した通りである。また、空間的な[経路]の場合も、第1節の(4)で例示したように、《起点》と《着点》は各々「カラ格」と「ニ格」で明示的に標示される。

これに対し、[時間]の場合、[着点]は主体の移動結果ではないので、次の(29)(a)が示すように《着点》に相当する「9月」を「に」で標示することはできず、(b)のように「まで」でなければならない。

(28)(a) *花子は7月から9月に夏の大半をカナダで過ごした。

(b) 花子は7月から9月まで夏の大半をカナダで過ごした。

このとき「9月」の標示が「に」ではなく「まで」にならなければならないというところに、[時間]が[対象]や[経路]と質的に異なることが反映されるのであって、ここにプロトタイプ効果が発現しているといっている。

さらに、[状況]については、次の(29)(a)が示すように《着点》に相当する下線部の「雨上がり」は「に」で標示できないだけでなく、(b)のように「まで」で標示することも適切ではない。

(29)(a) *太郎は降り始めから雨上がりに雨の中を懸命に走った。

(b) ?太郎は降り始めから雨上がりまで雨の中を懸命に走った。

つまり、そもそも「雨上がり」を明示的にコード化すること自体が不自然なのであって、この点で[状況]は[時間]より更に中心的メンバーから遠くに位置づけられることになる。このとき《起点》や《着点》が明示的に共起しないにもかかわらず[状況]の対格を《過程》として分析するのは「雨の中を」が「走る」という事象の中で“真っ只中の側面”を表すとともに主格と対極的な関係にあるからである。^[14]

以上、本節では、[時間]と[状況]を含めた包括的なネットワークを作るとともに、範疇内の不均質性をプロトタイプ効果によって確認した。

5. 結語

本稿は、現代日本語における「ヲ格」の意味機能を包括的に考察し、中核的意味の解明とネットワーク化を試みた。本文で検討した「ヲ格」の特性は次のように要約される：

- [i] 日本語の対格は主格の対極にあって、イメージスキーマ《起点→過程→着点》における《過程》のプロファイルとして意味的に規定される。
- [ii] 意味役割としての[対象][経路][起点][時間][状況]は《過程》を中核とした隠喩的写像によりネットワーク化され、《起点》および《着点》との共起可能性においてプロトタイプ効果が確認される。

以上により他の格との弁別的差異も確認されるので、この点で「ヲ格」は意味的に輪郭が明確にされたと思われる。ただ、空間次元の[経路]と[起点]については、幾つかの複雑な言語現象と関わるため、稿を改めて詳しく論述するつもりである。

注

- [1] 形容詞文が基本的に対格をとらないという事実も、形容詞が時間的な経過を伴う《過程》をプロファイルできないことに帰着されると思われる。
- [2] 厳密に言えば、[経路]の「ヲ格」と共起する「ニ格」は[着点]というより[方向]と言うべきであるが、本稿では[着点]と[方向]を区別しないで扱うことにする。
- [3] 対格が《過程》をプロファイルするという本稿の分析は、移動動詞「走る」に対して「トップを走る」のような表現が可能になることも適切にカバーする。このような対格の「トップ」は勿論[経路]ではないが「走る」という事象の《過程》において主格NPが位置する相対的な関係を把らえたものだからである。
- [4] 類例として「湯を沸かす」「井戸を掘る」「妻をめとる」などがある。
- [5] ただし「ニ格」の用法には「机上に本がある」のような静的な[存在点]や「友人に本を借りる」のような[起点]相当句もあるが、詳細については別の機会に委ねたい。
- [6] (12)(b)の文も「太郎の成績不振」を[原因]と解釈すれば容認される。
- [7] この点について Kabata and Rice(1997:113)は「ニ格」が事象の中へ意識的に参与すると特徴づけているが、語源的な理由に比して説得力に欠けることは明白であろう。
- [8] この点については、杉本(1995)も参照されたい。
- [9] 対格が[経路]や[起点]を表すことについて、川端(1986:25-26)、山田(1981:96-98)、Muehleisen and Imai(1997:324-344)などは[起点]や[経路]の意味機能を[対象]から導き出そうとしており、杉本(1986)は他動性の観点から[経路]に[対象]との連続性を求めているが、微妙な文法現象を意味的に

説明するためには、中核的な《過程》という概念を導入することが不可欠と思われる。詳細については別稿で論じたい。

- [10] (23)の図の中の「過程」が本稿でいう《過程》と異なることは言うまでもない。
- [11] 対格成分が[時間]で解釈されるのは、必ずしも時間の経過を前面に出した動詞のときに限られない。例えば「A投手は2回の途中から9回の途中まで7インニングスを投げ切った」と言えば、対格の「7インニングス」は[時間]に準じるものとして解釈されよう。このように、通常の行為動詞でも対格が[時間]として解釈されることから、体系の変化として[時間]の用法が広がりつつあると言っているのかも知れない。
- [12] この点に関連して、杉本(1993)は[状況]の「ヲ格」を空間的な移動格(経路)の一種と分析している。
- [13] 「プロトタイプ効果」というのは、範疇内部の不均質性を反映した次のような現象をいう。すなわち、ある範疇に対して固有にはたらく要因が存在するとき、その要因は範疇内のメンバー全てに対して一様に作用するのではなく、より典型的なメンバーほど適応されやすく、非典型的なメンバーほど適応されにくいという性質である。
- [14] 話者によっては(29)(b)を容認するかもしれないが、(29)(b)が自然に容認されるとき下線部が時間次元で解釈されていることに注意されたい。

参 考 文 献

- 池上嘉彦 1993 「<移動>のスキーマと<行為>のスキーマ——日本語の『ヲ格+移動動詞』構造の類型論的考察——」『外国語科学研究紀要』(東京大学教養学部外国語科) 第41巻・第3号, pp. 34-53.
- 影山太郎 1980 『日英比較・語彙の構造』松柏社.
- 川端善明 1986 「格と格助詞とその組織」宮地裕(編)『論集日本語研究(一)』明治書院, pp. 1-40.
- 久野 暉 1973 『日本文法研究』大修館書店.
- 国立国語研究所 1997 『日本語における表層格と深層格の対応関係(国立国語研究所報告113)』三省堂.
- 児玉徳美 1991 『言語のしくみ——意味と形の統合』大修館書店.
- 城田 俊 1993 「文法格と副詞格」仁田義雄(編)『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版, pp. 67-94.
- 菅井三実 1997 「格助詞『で』の意味特性に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』127(文学43), pp. 23-40.
- 杉本 武 1986 「格助詞」奥津敬一郎・田沼善子・杉本 武(共著)『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社, pp. 227-380.
- 1993 「状況の『を』について」『九州工業大学情報工学部紀要 人文・社会科学篇』第6号, pp. 25-37.
- 1995 「移動格の『を』について」『日本語研究・第15号』東京都立大学国語学研究室, pp. 120-129.
- 仁田義雄 1993 「連語論——ヲ格名詞の対象性」『國文學』第38巻・第12号(1993年11月号), pp. 49-53.
- 三宅知宏 1996 「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』第110号, pp. 143-168.
- 山田 進 1981 「機能語の意味の比較」国廣哲彌(編)『日英語比較講座[3]意味と語彙』大修館書店, pp. 53-99.
- 山梨正明 1994 a 「日常言語の認知格モデル[2]——格解釈のゆらぎ」『言語』第23巻・第2号(1994年2月号), pp. 100-105.

- 1994 b 「日常言語の認知格モデル[6] — 意味のモード」『言語』第23巻・第6号
(1994年6月号), pp. 104-109.
- Claudi, U. and B. Heine
1986 "On the Metaphorical base of grammar," *Studies in Language*, 10 (2),
pp. 297-335.
- Heine, B., U. Caudi, and F. Hünemeyer
1991 "From cognition to grammar: evidence from African languages," In
Traugott, E. C. and B. Heine (eds.), *Approaches to grammaticalization.*
Vol. 1.: Typological Studies in Language (TSL), Vol. 19a. Amsterdam
and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, pp. 149-187.
- Hopper, P. J. and S. A. Thompson
1984 "The discourse basis for lexical categories in universal grammar," *Lan-*
guage, 60, pp. 703-52.
- Johnson, M. 1987 *The Body in the Mind*, Chicago and London: The University of Chicago
Press.
- Kabata, Kaori and Sally Rice
1997 "Japanese *ni*: the particulars of a somewhat contradictory particle," In
Verspoor, M. H., *et al.* (eds.), pp. 102-127.
- Lakoff, G. 1987 *Women, Fire, and Dangerous Things*. (what categories reveal about
the mind.) Chicago: University of Chicago Press.
- Muehleisen, V. and Mutsumi Imai
1997 "Transitivity and the incorporation of ground information in Japanese
path verbs," In Verspoor, M. H., *et al.* (eds.), pp. 329-346.
- Verspoor, M. H., K. D. Lee, and E. Sweetser (eds.)
1997 *Lexical and syntactical constructions and the construction of meaning*
(*Current Issues in Linguistic Theory*, 150). Amsterdam and Philadel-
phia: John Benjamins Publishing Company.